# モンゴル帝国時代のモンゴル人の命名習慣に関する一考察

エルデニバートル（内モンゴル大学モンゴル歴史学部）

チンギス・ハーン及びその子孫による大規模な対外征服戦争中、漢、女真、西夏、高麗、欽察（キプチャク）、阿速（アスタイ）、斡魯思（オロス）などの諸民族および国の人々はモンゴル地域へ移民された。14 世紀に元朝が滅亡した後、モンゴル高原にいたこれらの複雑な背景をもつ人々はモンゴル人として融合してゆく。モンゴル帝国時代のモンゴル人は他の国、民族、部落及び地域の名を自分の子供に名付ける習慣があった。例えば、撒里答（サルタグ）、鎖郎哈（ソロンハー）、唐兀歹（タングダイ）、忻都（インド）、囊加台（ナンギヤタイ）、蛮子台（マンサタイ）、合失（ハシン）、阿速台（アソタイ）、欽察、斡罗思（オロス）、馬札儿（マジャル）、阿魯浑（アルグン）、术赤台（ジョルチタイ）等。このような名付け習慣はモンゴル人の他民族・国家と交流やコミュニケーションを持っていたことを物語っている。元朝が滅亡した後、モンゴルに融合ししていたこれらの民族・国の名称もモンゴル部落の苗字として定着した。17 世紀のモンゴル史料には肃良合（ソロンガー）、撒児塔兀（サルトール）、勒哈剌沁（ハラチン）、阿速等（アソード）等の名称が多数現れるのである。

（原本は中国語、翻訳：ナヒヤ）